明治期文語体小説における時の助動詞
：森鷗外『舞姫』を例に

Auxiliary verb of time in the literary style novel of the Meiji period

：A case study on *“Maihime”* by *MORI Ogai*

丹羽　叶
NIWA, Kanae

摘要

In this paper, we focused on the auxiliary verb of time and described the viewpoint of analyzing the actual operation of the auxiliary verb of time in the Meiji period literary style novels. During the period of colloquial style from the latter half of the Meiji period to the Taisho period, the time expression in sentences changed significantly. The system that uses auxiliary verbs of time such as *Ki-Keri-Tsu-Nu-Tari-Ri* has changed from a system that uses a limited form, *Ta* and *Teiru*. We thought that observing and describing this transition from grammatical phenomena would capture the framework of time expression in modern literary sentences and describe the process of establishing word-sentence agreement. Therefore, in this paper, as an example of the modern literary style, *MORI Ogai "Maihime"* was used as a material, and the actual operation of auxiliary verbs at the time was analyzed from the viewpoint of structural differences in sentences and the classification of verbs. As a result, it was clarified that there was a kind of functional division in the auxiliary verb of time due to the structural difference of sentences. In addition, from the viewpoint of the meaning classification of the verbs that the auxiliary verbs of the time at the end of the sentence of the descriptive part accepts, it was clarified that there is a tendency for the auxiliary verbs when they are used depending on the presence or absence of aspect conflict of the verbs. We mentioned the tense and aspect of the auxiliary verb of time. We pointed out that the auxiliary verbs of the time in the Meiji literary style novels may indicate the operation of modern literary languages influenced by the spoken language, rather than following the usage of ancient words.

キーワード：*近代語　言文一致　文語体小説　時の助動詞　森鷗外*

Keywords: Modern Japanese　Colloquial style　The literary style novel　Auxiliary verb of time　*MORI Ogai*

1.　はじめに

明治時代後半から大正時代にかけての言文一致期において、文における時間表現は、大きく変容した。つまり、キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リという複数の時の助動詞を使用する体系から、タ・テイルという限られた形態を使用する体系へと移行した。これは文体において、文語体か

ら口語体に移行する時期と連動する。

かねてより、当時の時の助動詞の使用状況については、実用的文章・文芸的文章という文の種別（岡本 1987、岡部 2008）や、文語文・口語文という文体別（山本 1971、野村 2013）の観点から研究が行われてきた。しかし、文法現象からの観察は、管見のかぎり手薄である。

言文一致以前には、話し言葉と書き言葉の間には大きな隔たりがあったが、主に文芸的文章から言文一致が押し進められ（山本 1971）、その隔たりが小さくなっていった。しかし、その推移の把握については、十全になされているとは言えない。この推移を、文法現象から観察・記述することは、近代語の文芸的文章における時間表現の枠組みを捉え、言文一致の成立過程を記述することになると考える。そこで本稿では、時の助動詞キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リに着目し、近代語の文語体小説の時間表現の枠組みを明らかにする。

また、文語体の時間表現の枠組みを捉えるには、言文一致期における文語文そのものを観察する必要がある。話し言葉と書き言葉の間に相当の隔たりがあった以上、文語文の時の助動詞と中古語の時の助動詞を照合するのではなく、近代語の文語文における使用状況をつぶさに観察・記述することが、言文一致期の文における時間表現の枠組みを捉えることになるのではなかろうか。もちろん、中古語との照合が不必要と言うのではない。しかしながら、通時的な変遷を捉える前に、まずは共時的な文語体・口語体の相違点や共通点の実態に目を向けることが、言文一致の過程の把握に繋がる。

稿者は、小説において、地の文における時の助動詞の運用実態が肝要であると考える。会話文は、発話者から事態が述べられる。対して地の文は、語り手の複数の事態の前後関係が時間表現に様々に表し分けられることから、それぞれの時代の時間表現の認識が現れる。文語体小説の地の文における時間表現は、文語といえども、近代期の日本語の使い手の、時間表現に対する認識を反映するものと推察する。

そこで本稿では、近代期文語体の一事例として、森鷗外『舞姫』を資料とし、明治期文語体小説における時の助動詞の使用状況および文法的機能を考察する。

2. 先行研究

本節では、言文一致期の文章において、文の種別による時の助動詞の使用状況および文語体・口語体小説の趨勢を調査した先行研究の記述をまとめる。

2.1. 文の種別による時の助動詞の使用状況

岡本（1987）は、明治文語を実用文と文芸文とに分けて「回想完了の助動詞の意味用法」（p.87）について、新聞や雑誌の記事など、文学作品以外の著述の文章では、「たり」「り」「き」が主として使用され、「けり」「ぬ」「つ」はあまり使用されないと指摘する。一方、文芸の文章では、特に「けり」を好み、「ぬ」「つ」も用いると述べる。しかし、完了の「ぬ」「つ」を書き分ける

のは、一部の知識人に限られており、過去を表すには「たり」「り」「き」を用いるのが一般であると述べる（p.88）。また、キの終止形について、上接語が限られ「ざりき」「なりき」「ありき」など「固定的な承接関係の枠内のもの」（p.88）と指摘する。

岡部（2008）は、雑誌『太陽』の明治 28（1895）年 1 月号、および明治 42（1909）年 1 月号から選出した記事において、時の助動詞の使用実態を文体別（文語文的・口語文的）および記事ジャンル別（実用文系統の文章・文学系統の文章）に調査した。そこで「③文学系統・文語文」（p.358）では「文語系の時の助動詞がほぼまんべんなく使用されている点で、実用文系統と異なるが、各助動詞の使用率は、タリ、リ、キが高く、ツ、ヌ、ケリが低いという実用文系統と同様の傾向を示している」（p.358）と指摘する。

2.2.　文語体・口語体の趨勢

野村（2013）は、明治 30 年代前半を中心に、『文芸倶楽部』『新小説』『太陽』に掲載された小説を対象として、文体の移り変わりを調査する。明治 28（1895）年には、文語体：口語体の比率は百分比でおよそ 86：14 であったが、明治 31（1898）年には、およそ 52：48 と接近し、明治 32（1899）年には、およそ 47：53 と両者の比率が逆転すると指摘する（p.273）。ただし、『文芸倶楽部』では文語体が優勢であると述べる。明治 33（1900）年には、およそ 38：62 と、前年は文語体が優勢であった『文芸倶楽部』でも口語体が優勢となり「その意味で明治三三年は、小説口語体の優位が確立した年と言うことができる」（p.274）と述べる（p.274）。

また、早くは山本（1971）に、『文芸倶楽部』『新小説』に掲載された小説の「言文一致体採用率」（p.350）の調査がある。結果は、明治 28（1895）年に 16%、明治 29（1896）年に 24%、明治 30（1897）年に 36%と上昇し、明治 32（1899）年に 57%と、言文一致体を採用する小説の割合が優勢であり（p.350）、野村（2013）の指摘とも符合する。

2.3.　本稿における課題と分析の観点

先行研究の記述をふまえると、明治期文語体小説における時の助動詞の使用状況は、キ・タリ・リを主とすると予想できる[i]。また明治 33（1900）年を境に、全体の趨勢として小説の文体は、文語体から口語体へと移行したことが分かる。文語体および口語体小説における時間表現の推移は、明治 33（1900）年を画期として検討する必要がある。一方、先行研究では、各形態の出現数の多寡や傾向を、そのまま文体としての特徴として記述するに留まっている。各形態がどのような機能を担い、時間表現の枠組みを成していたのか、古典古文や口語体の枠組みとどのような関係（相違点・共通点）を持っているかは、明らかではない。

本稿では、まず地の文における時の助動詞を採取し、用例数および使用される割合を算出する。また、地の文における各形態の機能を考えるにあたって、地の文の文末における各形態が承接する動詞の意味分類や共起する時間副詞に着目し、文法的機能を分析する。

3. 調査対象

本稿の調査対象は以下の通りである。書誌情報および本稿の底本を記載する。なお、森鷗外『舞姫』は、会話文・地の文共に文語体である。

森鷗外『舞姫』

初出：明治 23（1890）年『国民之友』民友社

底本：昭和 60（1985）年『現代日本文学大系 7　森鷗外集（一)』筑摩書房

本稿で森鷗外を取り上げるのは、次の点において、言文一致期の時の助動詞の運用実態を調査するに有効であるためである。

①文語体小説において、時の助動詞キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リを使用するため

②文語体小説・口語体小説どちらも残しているため

③明治時代後半から大正時代にかけて執筆活動を行っているため

全ての形態を使用するからこそ、古典古文との相違点、近代文語独自の運用や枠組みを把握できる。独自の運用が確認できれば、言文一致へ向けた萌芽と見ることができるだろう。また、今後、限られた形態を使用する書き手との比較や、口語体との比較にも適うためである。

4. 用例数と使用率

本節では、森鷗外『舞姫』における時の助動詞の用例数と使用率について、地の文の全体・文末・文中の調査結果を提示する。地の文の文中・文末に着目するのは、使用される位置によって傾向が看取されるか否かを把握するためである。本節以下の表におけるセル内の数字は、各形態の用例数を、カッコ内の数字は、各形態の使用率（%）を示す[ii]。また、句点から句点までを一文とした。

地の文における各形態の用例数と使用率は、表 1 の通りである。網掛け部分は、地の文の全体・文末・文中における使用率の上位 2 形態である。

表 1 ：地の文における時の助動詞の使用数

	キ	ケリ	ツ	ヌ	タリ	リ	計
全体	198(44.8)	10(2.3)	36(8.1)	42(9.5)	140(31.7)	16(3.6)	442
文末	31(23.0)	6(4.4)	25(18.5)	38(28.1)	28(20.7)	7(5.2)	135
文中	167(54.4)	4(1.3)	11(3.6)	4(1.3)	112(36.5)	9(2.9)	307

表 1 において注目されるのは、地の文の文中と文末で、使用率が異なる形態がある点である。地の文の全体においては、キの使用率が最も高く（44.8%）、次いでタリの使用率が高い（31.7%）。ケリ・ツ・ヌ・リは、使用されてはいるが、使用率は低い。地の文の文末においては、ヌの使

用率が最も高く（28.1%）、次いでキの使用率が高い（23.0%）。地の文の文中においては、キの使用率が最も高く（54.4%）、次いでタリの使用率が高い（36.5%）。地の文の文中と文末における使用率を比較すると、文末では各形態の使用率に差があるとはいえ、キ・ツ・ヌ・タリについては、それぞれ約 20%前後の使用率である。対して、文中ではキ（54.4%）・タリ（36.5%）に集中している。以上より、文中であるか文末であるかという文の構造的な差異によって、時の助動詞の使用に傾向があると言える。例えば、ツ・ヌは、地の文の文末に集中しており、全て終止形で使用されていた。古典古文においてツ・ヌは、終止形を専らとしているわけではない[iii]。近代文語において時の助動詞は、形式として踏襲されながら、その運用は近代文語独自の傾向や枠組みを持っている可能性がある。

では、地の文の文中と文末におけるそれぞれの時の助動詞の使用率の差異は、なぜ生じるのか。複数の活用形が使用されているキ・タリに注目すると、地の文の文中において、連体形の用例が多かった（キ 167 例中 160 例、タリ 112 例中 90 例）。以下、用例をあげる[iv]。

(1)　こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のまゝなるは、独逸にて物学びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の気象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。（p.157）

(2)この截り開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所の業の隙を偸みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷なる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小をんなが持て来る一盞の咖啡の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに挿みたるを、幾種となく掛け聯ねたるかたへの壁に、いく度となく往来する日本人を、知らぬ人は何とか見けん。（p.161）

(1)キは「とき」「冊子」「間」という名詞を、(2)タリは「引窓」「業なき若人」「新聞」「かたへの壁」という名詞（句）を修飾している。地の文の文中におけるキ・タリは、(1)(2)のような連体法という環境において使用しやすいことが見受けられる。よって、言文一致期の小説における時間表現を把握するには、地の文の文中・文末を分けた観察を要する。このうち、地の文の文中の時間は、文末の時制との時間関係によって決まってくる。そのため、まず地の文の文末の時間表現の実態を把握することから始めねばならない。次節以降、地の文の文末に焦点を当て、時の助動詞の分析を進める。

5.　分析の観点―動詞の意味分類

明治期の文語体小説における時の助動詞の運用実態を明らかにするべく述部に立つ動詞の文法的な意味分類に着目する。動詞の文法的な意味によって時の助動詞の使用状況に表出する差

異を観察する。動詞の文法的な意味による下位分類について、工藤（1995）をもとにまとめる。

工藤（1995）は、アスペクト対立の有無に着目し、動詞を大きく、（A）外的運動動詞、（B）内的情態動詞、（C）静態動詞に 3 分類する。（A）外的運動動詞・（C）静態動詞はアスペクトの有無で対立しており、（B）内的情態動詞はその中間に位置づけられる[v]。

（A）外的運動動詞は、時間のなかに成立・展開（開始）・生滅（終了）し、場合によっては、結果を残す、ものの動態的な運動をとらえている動詞らしい動詞である（例：開ける、あげる、行く、見る、動く）。一方（C）静態動詞は、時間のなかへの現象を問題にしえない、関係や特性をとらえるか、時間のなかに現象したとしても、時間的展開性のない、存在や空間的配置をとらえるスタティックなものである（例：ある、いる、存在する、似合う）。（B）内的情態動詞は、（A）外的運動動詞・（C）静態動詞どちらにも所属させにくい動詞であり、時間的展開性があるものの、人の内的事象をとらえる動詞が属する（例：思う、安心する、聞こえる、感じる）（工藤 1995、pp.70-78）。

本稿では、工藤（1995）が提示する 3 分類に基づき、文脈に応じて私に動詞を分類する。動詞の有するアスペクト的特徴に着目し、動詞と時の助動詞の承接関係を観察することで、動詞の持つ文法的な意味という客観的な条件から、各形態の機能を観察できる。次節以降、動詞の文法的な意味分類から、文語体小説における各形態の運用実態について、森鷗外『舞姫』を資料に分析を行う。

6. 動詞の意味分類と時の助動詞の承接関係

本節では、実際の用例を取り上げて、明治期文語体小説の文末における時の助動詞の運用実態を分析する。各形態について、動詞の文法的な意味分類に着目し、承接関係に傾向が看取されるかを見る。そのため、動詞に承接するか否かについても確認する。なお、時の助動詞の相互承接や、その他の助動詞に承接する用例（断定や受身など）、局面動詞に承接する用例は、動詞以外とした。動詞に承接する打消の助動詞は、打消の助動詞の承接先の動詞を採取し、動詞とした。また、テンスについては時間副詞との共起、アスペクトについては動詞類型に見られるアスペクト的特徴からも検討する。

6.1. キ

地の文の文末におけるキは、動詞に承接する例が 12 例、動詞以外に承接する例が 19 例であった。次に、キが承接する動詞を見る。

表２：外的運動動詞（A）・内的情態動詞（B）・静態動詞（C）に承接するキの用例数

	A	B	C	計
キ	6(50.0)	6(50.0)	0(0.0)	12

表２を見るに、キは、（A）（B）に承接する。以下に、動詞に承接するキの用例をあげる[vi]。

(3)　食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路は概ね平滑なりしに、轗軻数奇なるは我身の上なりければなり。余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閲歴を聞きて、かれは屡〻驚きしが、なか／＼に余を譴めんとはせず、却りて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の畢りしとき、彼は色を正して諫むるやう、この一段のことは素と生れながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はんも甲斐なし。（p.162：A）

(4)　別れて出づれば風面を撲てり。二重の玻璃窓を緊しく鎖して、大いなる陶炉に火を焚きたる「ホテル」の食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さは殊さらに堪へ難く、膚粟立つと共に、余は心の中に一種の寒さを覚えき。（p.163：B）

(5)　我学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにといふに、凡そ民間学の流布したることは、欧洲諸国の間にて独逸に若くはなからん。（p.161：B）

(3)-(5)を見るに、「答える」や「罵る」といった動詞らしい動詞（A）や、「覚える」や「長ず」といった見た目には動きが伴わない動詞（B）に承接する。(3)は「物語の畢りしとき」まで「余」が「答える」のを聞き「彼」が「罵った」出来事を、(4)は寒さを感じた「ホテル」の食堂を出た瞬間を、(5)は学問が荒んだ一方で見識がすぐれた「余」の状態を述べる。(3)-(5)は、どれも「余」の留学中に起きた出来事や状態を述べている。

キは、時間的展開性を有する動詞（A）（B）に承接している。(3)(4)を見るに、動作によって示される事態の局面（発生・継続・完了）を示すとは捉えにくい。事態の局面を示すのであれば、はじめに示された事態を受けて、次の事態が展開するはずである。(3)(4)は、キが示す動作の発生や継続を示すわけではない。(5)は、「余」の「見識」が「長じていない」状態から「長じた」状態になったことを示しており、「余」の状態の変化と捉えられる。これを変化の完了と捉える余地はあるが、近代文語体において、キが主に完了の表示を担うのであれば、時間的展開性が明確な動詞にのみ承接するはずである。

また、キが動詞以外に承接する例から考えると、時間的展開性を問題とせず、ただ、述べる事態がある時点より過去であることを示していると考えられる。

(6)彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。（p.158）

(7)　人事を知る程になりしは数週の後なりき。（p.165）

(6)は、「余」が語を学んだかを問われないことがないという事実が過去であることを、(7)は、「余」がその後の事を知ったのが数週間後であるという事実が過去であることを示していると分かる。キが、名詞＋打消の助動詞や、断定「ナリ」に承接するということは、「である」と言い切った時間的展開性を示さない事態について、過去の一時点に位置づけていると言える。

時間副詞に着目すると、キが、絶対テンスに関与し、過去を表す時間副詞と共起する用例が見られた。

(8)室を温め、竈に火を焚きつけても、壁の石を徹し、衣の綿を穿つ北欧羅巴の寒さは、なか／＼に堪へがたかり。エリスは二三日前の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に扶けられて帰り来しが、それより心地あしとて休み、もの食ふごとに吐くを、悪阻といふものならんと始めて心づきしは母なりき。（p.162）

(9)わが舌人たる任務は忽地に余を拉し去りて、青雲の上に堕したり。この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書を寄せしかばえ忘れざりき。（p.163：B）

(8)は、「二三日前の夜」に「エリス」が舞台で倒れ、「エリス」が悪阻ではないかと気づいた人物が「母」であったことを述べる。気づいた人物が誰であったかを述べるにキが使用されている。(9)は、「余」が留学中に、大臣の一行に随行して、ロシアに行った出来事を回想する。「この間」は、「ロシアへの随行」という長期にわたる出来事の全体を表しており、その間、「余」が「忘れられなかった」という事実は、「余」がロシアから帰国済であるため、過去の出来事である。過去を表す絶対テンスに関与する時間副詞との共起からもキは過去を示すと考えられる。

地の文において、キは、絶対テンスに関与する時間副詞との共起や、過去を表す点で中古語と共通している。しかし会話文を見てみると、発話当日中の過去の事態を表している。

(10)「我を救ひ玉へ、君。わが恥なき人とならんを。母はわが彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らでは愜はぬに、家に一銭の貯だになし。」（p.159）

(10)は、会話文の用例ではあるが、発話者である「我」が「母」に叩かれたという発話当日中の過去の事態に、キが使用されている。中古以降のキは、発話当日中の過去を表さない（鈴木 1999）。(10)のように、発話当日中の過去を表すキは、中古語のキには見られない用法であり、明治期文語独自の運用と言える。

6.2. ケリ

地の文の文末におけるケリについて、動詞に承接する例は採取されず、動詞以外に承接する

例が 6 例であった。動詞以外に承接するケリを見ると、自分の地位の危うさを「当時」と振り返り(11)、留学中の自分が毎日繰り返し読書に「終日」耽っていたと回顧し(12)、留学中の季節の到来を「明治廿一年の冬」と述べる(13)。

(11)官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を懐きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が当時の地位なりけり。（p.158）

(12)　嗚呼、何等の悪因ぞ。この恩を謝せんとて、自ら我僑居に来し少女は、ショオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日兀坐する我読書の窻下に、一輪の名花を咲かせてけり。（p.160）

(13)　明治廿一年の冬は来にけり。表街の人道にてこそ沙をも蒔け、鍤をも揮へ、クロステル街のあたりは凸凹坎坷の処は見ゆめれど、表のみは一面に氷りて、朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。（pp.161-162）

(11)-(13)は、自分の状況や習慣、季節の到来の回顧というまとまった時間を示している。キが絶対テンスに関与する時間副詞と共起し(8)(9)、留学中の出来事や動作の過去を示す一方、ケリは相対テンスに関与する時間副詞との共起し(11)-(13)、ある時点から見た過去を示す。絶対テンスと結びつくキとは異なり、ケリは、一定の距離を置いた時点から、過去の出来事を振り返る場合に使用されている。

6.3.　ツ

地の文の文末におけるツについて、動詞に承接する例が 19 例、動詞以外に承接する例が 6 例であった。次に、ツが承接する動詞について見る。

表３：外的運動動詞（A）・内的情態動詞（B）・静態動詞（C）に承接するツの用例数

	A	B	C	計
ツ	19(100)	0(0.0)	0(0.0)	19

表３を見るに、ツは（A）にのみ承接する。他の形態と比較しても（A）との結びつきが強固であると考えられる。ツは、時間的展開性を有する動詞にのみ承接することから、事態の局面を示すと推察される。以下に、動詞に承接するツの用例をあげる。

(14)さきの老媼は慇懃におのが無礼の振舞せしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨にて、右手の低き窻に、真白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を掩へる臥床あり。伏し

たるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この処は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。（pp.159-160：A）

(15) 今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。エリスは床に臥すほどにはあらねど、小き鉄炉の畔に椅子さし寄せて言葉寡し。この時戸口に人の声して、程なく庖厨にありしエリスが母は、郵便の書状を持て来て余にわたしつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手は普魯西のものにて、消印には伯林とあり。（p.162：A）

(14)は、「老媼」が部屋に迎え入れた「余」をヲ格で示す。「余」は迎え入れられた後、部屋の様子を認識し、述べている。さらに「老媼」が部屋の内部にある戸を開けた「余」をヲ格で示す。「余」は内部の戸の一間の様子を認識し、述べている。すなわち、「老媼」の「迎え入れる」「導く」という動作が終了してはじめて「余」は部屋の内部を認識し、述べられるのであって、ツは動作の完了を示すと考えるのが自然である。(15)は、「エリスが母」が「余」に渡した「郵便の書状」をヲ格で示す。次に、「見れば見覚えのある」とあるため「郵便の書状」が「余」の手に渡っており、開封し、文面を確認したと分かる。すなわち、「エリスが母」の「渡す」という動作が終了してはじめて「余」は手紙の文面を確認できる。これも(14)同様、ツは動作の完了を示すと考えられる。

中古語のツと比較して、事態の完了を示すと考えられている（鈴木 2009、井島 2011）点では共通している。しかし、中古語におけるツは、全体に対する連体形の割合も 4 割強であり（井島 2011）、ツが文末用法に集中することが異なる。

6.4. ヌ

地の文の文末におけるヌについて、動詞に承接する例が 37 例、動詞以外に承接する例が 1 例であった。次に、ヌが承接する動詞について見る。

表 4：外的運動動詞（A）・内的情態動詞（B）・静態動詞（C）に承接するヌの用例数

	A	B	C	計
ヌ	25(67.6)	9(24.3)	3(8.1)	37

表 4 を見るに、ヌは（A）を主として、（B）（C）に承接する。ヌは、時間的展開性を有する動詞を主とすることから事態の局面を示すが、（B）（C）にも承接している。ツと比較すると、ヌはツよりも広い用法を持つと考えられる。次に、ヌの用例を観察する。

(16) 我が隠しには二三「マルク」の銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急を凌ぎ玉へ。質屋の使のモンビシユウ街三番地にて太田と尋ね来ん折には価を取らすべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別のために出したる手を唇にあてたるが、は

ら／＼と落つる熱き涙を我手の背に濺ぎつ。（p.160：A）

(17)余は始めて、病牀に侍するエリスを見て、その変りたる姿に驚きぬ。彼はこの数週の内にいたく痩せて、血走りし目は窪み、灰色の頬は落ちたり。相沢の助にて日々の生計には窮せざりしが、此恩人は彼を精神的に殺しゝなり。（p.165：B）

(18)　幾百種の新聞雑誌に散見する議論には頗る高尚なるもの多きを、余は通信員となりし日より、曾て大学に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みては又読み、写しては又写す程に、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、自ら綜括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ。（p.159：C）

(16)は、「余」がはずした時計をヲ格で示す。机の上に置いた時計を見て「エリス」は驚き感じる様子を見せる。ヌが示す「余」の「置く」という動作が完了してから、「余」は話しはじめる。(17)を見ると、病床に伏せる「エリス」を見て「余」が驚いた様子をヌで示す。(18)では、「余」の知識が「同郷の留学生など」が思いもよらない程度になったことを述べる。(16)-(18)より、ヌが示す事態は、過去に発生・完了し、過去のある時点においても、その効力を維持している。よってヌは、既に実現した事態を示すと考える。

中古語のヌについて、主に過程性を持たない変化動詞に使用され、限界到達を表すという指摘がある（鈴木 2009）。しかし(16)のように、時間的展開性を有する動詞（A）に承接している。また、ヌが文末用法に集中することから、一文の中で述べられる複数の事態の前後関係を表すことができないと考えられ、中古語とは異なる運用が認められる。

ここで、ツ・ヌについて双方の比較が可能な（A）に承接する用例に着目する。また（A）において、出発・移動中・到着というように、時間的展開性が捉えやすい移動動詞に承接する用例を観察する。

(19)エリスが母の呼びし一等「ドロシユケ」は、輪下にきしる雪道を窗の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に被ひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して楼を下りつ。彼は凍れる窗を明け、乱れし髪を朔風に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしは「カイゼルホオフ」の入口なり。（p.162：A）

(20)戸口に入りしより疲を覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふ如くに梯を登りつ。庖厨を過ぎ、室の戸を開きて入りしに、机に倚りて襁褓縫ひたりしエリスは振り返へりて、「あ」と叫びぬ。（p.165：A）

(21)門者に秘書官相沢が室の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階を登り、中央の柱に「プリユツシユ」を被へる「ゾフア」を据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばこゝにて脱ぎ、廊をつたひて室の前まで往きしが、余は少し踟蹰したり。（p.162：A）

(19)は、「相沢」からの書状を受け、「余」が大臣と、それに随行する「相沢」が滞在する「カイゼルホオフ」へ行く場面である。「カイゼルホオフ」へ行く「余」のために「エリスが母」が呼んだ「ドロシユケ」は既に窓の下に到着している。ヌが承接する「来る」という動作は既に完了し、その場所＝窓の下にいる。次に、「余」は出発の準備を整え、楼を下りる。下り終わった「余」を見送るべく、「彼」は窓を開ける。ツで示される「下りる」という動作は完了し、移動が終わって到着済である。また(20)は、「余」が家に帰ってきた場面である。「余」が家の戸口に入り、梯子を登って台所を過ぎ、部屋の戸を開けて中に入る。梯子を「登り切っている」、すなわち「登る」という動作は完了し、場所も移動済である。(21)は、「余」が相沢に会いに彼の部屋に行った場面である。「余」は前室に入って、コートを脱いでいる。「入る」という動作は既に完了し、その場所でコートを脱ぎ、奥にある部屋へ歩を進める。(19)-(21)より、ツは移動が終わって到着済であることを示し、ヌは移動が終わってその場所に滞在中であることを示すと分かる。ツは動作の完了を受けて、次の動作への移行を担うため、時間的展開性が明確な（A）に承接し、ヌは動作の完了によって実現する事態に使用されることから、時間的展開性が明確でない（B）（C）にも承接すると考える。

移動動詞に承接する中古語のツ、ヌについて、ツは、移動が終わってどこかに到着済を、ヌは、出発し移動中を示すとされる（井島 2011、p.191）。(19)-(21)を見ると、(19)(20)ツは移動が終了し到着済を示すと言えるが、(19)(21)ヌは移動中ではなく、移動済である。以上より、ツは動作の完了、ヌは既実現事態を示すと考えられる。

6.5. タリ・リ

地の文の文末におけるタリ・リ[vii]について、動詞に承接する例が、タリで 26 例、リで 7 例、また動詞以外に承接する例が、タリで 2 例、リで 0 例であった。次に、タリ・リが承接する動詞について見る。

表５：外的運動動詞（A）・内的情態動詞（B）・静態動詞（C）に承接するタリ・リの用例数

	A	B	C	計
タリ	16(61.5)	5(19.2)	5(19.2)	26
リ	7(100)	0(0.0)	0(0.0)	7

表５を見るに、タリは（A）を主として（B）（C）に承接する。リの用例は少ないが、（A）に承接する傾向が見られた。以下に、動詞に承接するタリ・リの用例をあげる。

(22)　今この処を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を呑みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。（p.159：A）

(23)エリス帰りぬと答ふる間もなく、戸をあらゝかに引開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老媼にて、古き獣綿の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり。（p.159：A）

(24)この処は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窻に向ひて斜に下れる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭の支ふべき処に臥床あり。中央なる机には美しき氈を掛けて、上には書物一二巻と写真帖とを列べ、陶瓶にはこゝに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。そが傍に少女は羞を帯びて立てり。
　彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。（p.160：A、A、C）

(22)は、「或る日の夕暮」に「余」が自宅へ帰る折、「エリス」と出会う場面である。「余」は「少女」の様子を見ながら、年齢や容姿を観察する。「余」の「見る」という動作は、観察する間は継続していると考えられる。(23)は、「或る日の夕暮」に出会った「エリス」に連れられ、彼女の家に行った「余」が、戸を引き開けた「老媼」の出で立ちを述べる場面である。エリスの家へ行った当時の「余」が、その時認識している「老媼」の出で立ちを述べており、「余」の眼前の様子を捉えていると推察される。(24)は、「エリス」に連れられて入った室内を「この処」と示す。「この処」という直示的な名詞によって、「余」がその時認識している室内の様子を述べると分かる。室内の様子について、花束が生けてある状態や、「少女」が「立つ」という動作が現在も継続している状態、「少女」の顔色をタリ・リで示す。(22)-(24)より、タリ・リは動作・事態の結果継続を示すと考える。

ここで、ツ・ヌと比較すべく、（A）移動動詞に承接しているタリ・リの例を観察する。

(25)見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手は普魯西のものにて、消印には伯林とあり。訝りつゝも披きて読めば、とみの事にて預め知らするに由なかりしが、昨夜こゝに着せられし天方大臣に附きてわれも来たり。（p.162：A）

(26)暫くしてふとあたりを見れば、獣苑の傍に出でたり。倒るゝ如くに路の辺の榻に倚りて、灼くが如く熱し、椎にて打たるゝ如く響く頭を榻背に持たせ、死したる如きさま

にて幾時をか過しけん。（p.165：A）

(25)は「相沢」から「余」に宛てた手紙の一節である。「われも来たり」の「われ」は「相沢」であり、「余」に向けてベルリン到着の旨を知らせている。手紙が「余」のもとに届いた時点で、「相沢」は既にベルリンに到着し、滞在している。「来る」に承接するタリは、出発してその場所に到着済であることを示している。また(25)は、「余」が日本に帰国することを「エリス」にどう伝えるか苦悩し、街をさまよう場面である。「余」は動物園の傍で「幾時」か過ごした、過去の出来事であると分かる。 (26)同様、「余」がさまよう内に、動物園の傍に到着して、その場所に存在していることを示す。結果継続を表す点で中古語と共通するが、時間副詞とも連動し、過去を示している点で、テンスとしての運用が認められる。よって、明治期の文語体におけるタリ・リは、動作・事態の結果継続を示し、時間副詞とも連動して過去を示すと考える。

7. 再考―文の構造的差異に見る時の助動詞の使用状況

ここで、第 4 節で述べた、文の構造による時の助動詞の差異を再考する。地の文の文中に注目すると、キ・タリは連体形、特に連体法の用例が多い。岡部（2008）は、言文一致期の口語体の文において、タリが連体法、テイルが終止法を中心に使用されるという機能分担が行われており、文語系の助動詞であるタリが、連体法という環境において使用され、口語系の助動詞複合辞テイルが、連体法という環境で使用されにくかったと指摘する。この指摘は、本稿の調査において、タリが文中で連体法の使用が多く見られた結果と符合する。キ・タリの用例を見ると、口語体のタやテイル（テイタ）と置き換えられると思われる。

(27) こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のまゝなるは、独逸にて物学びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の気象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。（p.157、(1)再掲）

(28)この截り開きたる引窗より光を取れる室にて、定りたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所の業の隙を偸みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷なる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小をんなが持て来る一盞の咖啡の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに挿みたるを、幾種となく掛け聯ねたるかたへの壁に、いく度となく往来する日本人を、知らぬ人は何とか見けん。（p.161、(2)再掲）

キ・タリは、文末で述べられる動作、事態の時点を基準に時間関係を示す相対テンスを担うと考えられないか。推測の域を出ないが、文末で述べられる動作や事態よりも過去か非過去か

を示すのはキ、結果継続か非継続かを示すのはタリ・リが担う。ツ・ヌが動作や事態の完了・成立を示す以上、主節時より過去か非過去かを示す文中に介入する隙はなく、文と文の事態の時間関係の表示に終始するのではないか。

8. 結語

本稿では、森鷗外『舞姫』を資料として、まず時の助動詞が使用される文の環境による使用状況より、文の構造的差異による使用状況の差異を明らかにした。次に、地の文の文末における時の助動詞が承接する動詞の意味分類と、時間副詞や動詞類型のアスペクト的特徴という観点から、各形態の運用実態を分析した。動詞のアスペクト対立の有無によって、使用される形態に傾向が看取されることを指摘し、各形態が示すテンス・アスペクトを述べた。

明治期文語体小説における時の助動詞は、文の構造的差異やテンス・アスペクトの表示に一定の使い分けが存している。例えば、ツ・ヌであれば、文末用法に集中しており（4 節）、文で述べられる事態について、時間的展開性を有する動詞（A）が示す動作の完了をツ、それ以外の動詞（B）（C）が示す事態の既実現をヌとする対立が見られた（6.3 節、6.4 節）。また、文の構造的差異によって時の助動詞に一定の使い分けがあると指摘し（4 節）、文中の使用が多かったキ・タリの用例には、口語体のタやテイル（テイタ）と置き換えられる例が見られた（7 節）。

以上の様相は、明治期文語体小説における時の助動詞が、古代語の用法を踏襲するのではなく、近代文語の要素としての運用を示していると考える。この古代語の運用と異なる様相は、何に起因するのであろうか。話し言葉の時間表現の枠組みが、文語体にも影響を及ぼしていると推察される。例えば、タリ・リは、本来古典古文において、アスペクトを示す時の助動詞であった。しかし、近代文語体小説『舞姫』においては、時間副詞や文末の事態と連動し、ある時点からの過去を示している（6.5 節）。また、タリは文中での使用も多く、タはタリの後継形式であることをふまえると、文語においてアスペクトを示すタリが、話し言葉のタの影響を受け、その用法が変化した蓋然性が高い。

本稿では、一資料のみを対象とし、明治期文語体小説における時の助動詞の運用実態を分析する観点を記述した。文法現象の観察による、近代語における小説の文体形成過程の記述の端緒と位置づける。今後、調査資料を拡大し、複数の時の助動詞を使用する文語体小説における運用実態を確認し、仮説を検証する必要がある。本稿で示した分析の観点を用いた、明治期文語体小説の広範な調査および話し言葉の影響の詳細な検討については、別稿を期する。

---

i 岡本（1987）、岡部（2008）の調査は、文中・文末の双方を含む。会話文・地の文について、岡本（1987）は明記しておらず、岡部（2008）は双方を含む。

ii 用例数は延べ数であり、各形態の使用率（%）は小数第 2 位四捨五入である。

iii 国立国語研究所（2020）『日本語歴史コーパス　平安時代編』

https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html（2020 年 11 月 4 日確認）を使用し、『源氏物語』におけるツ・ヌの活用形を整理すると、多寡はあるものの、全ての活用形が使用されていた。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	総計
ツ	207(13.4)	161(10.4)	389(25.2)	614(39.7)	151(9.8)	23(1.5)	1545
ヌ	511(15.7)	1007(30.9)	1154(35.4)	406(12.4)	154(4.7)	32(1.0)	3264

iv 用例の引用にあたっては、適宜稿者によって、時の助動詞および承接する動詞句に下線を、時間副詞に破線を付した。表記は本文ママである。カッコ内は底本のページ数である。

v （A）（B）（C）はそれぞれ下位分類を有するが、ここでは詳述しない。

vi 用例の引用にあたっては、動詞に承接する例について、動詞の意味分類をカッコ内に記した。また、複数ある場合は、下線を付した順にカッコ内に記した。

vii タリ・リの発生状況から考えて、両者には文法的意味での差異はないと考えられるため、区別せずに扱う。

参考・引用文献

井島正博（2011）『中古語過去・完了表現の研究』（ひつじ書房）

岡部嘉幸（2008）「雑誌『太陽』における時の助動詞―文体と時の助動詞使用のダイナミズム―」『ことばのダイナミズム』pp.353-368（くろしお出版）

岡本勲（1980）『明治諸作家の文体―明治文語の研究―』（笠間書院）

―――（1987）「文体の違いと語法の差―明治文語の「ぬ」「つ」をめぐって―」『文学・語学』114：pp.86-97（桜楓社）

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』（ひつじ書房）

鈴木泰（1999）『改訂版　古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析―』（ひつじ書房）

―――（2009）『古代日本語時間表現の形態論的研究』（ひつじ書房）

野村剛史（2013）『日本語スタンダードの歴史―ミヤコ言葉から言文一致まで』（岩波書店）

―――（2015）「物語・小説のテンス・アスペクト形式」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』22、pp.23-36（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻）

山本正秀（1971）『言文一致の歴史論考』（桜楓社）